これからの仏教書はどこへ向かうのか？
仏教書編集者座談会

穂原俊二（太田出版発行人）
金寿煥（新潮社新書編集部）
川島栄作（サンガ編集部）
〈司会〉佐藤由樹（サンガ編集部編集長）

かつての仏教書は、その深遠さゆえに独特の雰囲気を持ち、中心となっていたのは一部の熱心な読者だった。しかし、ここ十年ほどで読者層は大きく変わった。「仏教書ブーム」という言葉も飛び交い、宗教に興味がない読者も仏教書を手に取るようになっていく。では、著者の原稿を書籍にまとめる編集者は、どのように仏教の魅力に惹きつけられ、仏教書を編集してきたのか？　各出版社の編集者の方にお集まりいただき、現在の仏教書をとりまく現状や、これからの仏教書について、鼎談形式で自由にお話をいただいた。

構成：森竹ひろこ（コマメ）

佐藤　本日はお忙しいところご足労いただき、ありがとうございます。私は司会を務めるサンガ編集部の佐藤由樹です。

私たちサンガは仏教書を中心とした出版社ですので、仏教に注目しすぎているところがあり、仏教にさほど関心のない一般の方々が仏教書をどう見ているのかということや、日本全体のなかでの仏教書の盛り上がり具合について、冷静に把握できていない部分もあるのでは、と感じています。

そこで今日は、さまざまな書籍に関わるなかで仏教書も作られている太田出版の穂原俊二さんと、新潮社の金寿煥さんにお越しいただきました。金さんは時代にのって活躍する仏教者の著書を一般新書として多数編集されて、読者の間口を広げられました。穂原さんは『アップデートする仏教』（藤田一照／山下良道、幻冬舎新書）を編集され、仏教の現状を直視し、タブーともいえる領域にまで踏み込んで日本の仏教界に一石も二石も投じました。お二人は広い知見をお持ちだろうと、私ども感じています。そこで今日は、サンガ編集部の川島栄作も交えて、仏教書の昨今の流れについて、ざっくばらんにお話できたらと思っています。

まずは、みなさんの仏教との関わりや、仏教書の編集に関わることになった経緯などをお聞きしたいと思いますが、太田出版の穂原さんいかがですか。

穂原　僕の場合、一九八九年にバックパックでインドを旅行した時に、カシミールでこれからタイで出家される日本人と出会ったことが、そもそもの始まりです。その方の仏教の話は意識論としてもとても面白く、その時にいただいた『仏陀の観たもの』（鎌田茂雄、講談社学術文庫）を、別れた後もインドを旅しながらボロボロになるまで夢中になって読みました。

その影響で帰国してからも各地のお寺を巡るようになり、もうお亡くなりになりましたが小池心叟老師がいらした文京区白山にある龍雲院・白山道場で参禅などしていました。

そのような時期に、蔵前にある「かやの木会館」にテーラワーダのお坊さんが来られると聞いて行きましたところ、アルボムッレ・スマナサーラ長老がいらっしゃいました。そこでテーラワーダ仏教を知りましたが、坐るということ、瞑想することの精緻な理論があり、勉強すればするほど面白いというのがわかり、「これは、すごい！」と感嘆しました。かやの木会館には龍雲院で早朝坐禅会に来られている人たちもいて、僕はそれを〝スマナサーラ・ショック〟と呼んでいるのですが。

佐藤　それは、何年のことですか。

穂原　九〇年代半ばだったと思います。そして、間をはしょりますが、二〇一一年の震災後にティク・ナット・ハンの著作、『法華経の省察』（春秋社）と出会い、ここに仏教の未来があると直感しました。ちょうど翻訳をされた藤田一照さんの講義が朝日カルチャーセンターであり、聴講したら素晴らしい内容だったので、その足で本を出しませんかと依頼しました。そうして藤田さんのご提案で、兄弟弟子の山下良道さんと文字通り膝を交えて話していただいたのが『アップデートする仏教』です。当時は幻冬舎に勤めていました。

佐藤　新潮社の金さんは、どのような経緯で仏教書の編集をされるようになりましたか。

金　僕はそれまでは特に仏教に興味があったわけではなくて、仕事上の必要に迫られてですね。一九九九年に新潮社に入社して、二〇〇二年に書籍部門に異動したのですが、そこで梅原猛さんの『京都発見』（新潮社）を担当することになりました。これは梅原さんが京都の寺社仏閣を訪ね歩き、その印象や由来を語るシリーズです。前任者から引き継いでシリーズの途中から担当したのですが、勉強不足が露呈して。それこそ日本史の教科書に載っているレベルから、仏教を勉強する必要が生じたんです。

さらに同時期にスタッフをしていた季刊総合誌『考える人』で、「からだに訊く」という特集をすることになりました。編集会議で「身体技法といえば、坐禅は外せないだろう」となって、一番若かった僕に白羽の矢が立ちまして。それで、当時の松家仁之編集長に「永平寺には南直哉さんという、すごい人がいる」とアドバイスを受けて、一泊二日の永平寺での坐禅体験に参加しました。終

了後、南さんにインタビューをお願いしたのですが、お会いして「現代に、こんな迫力のあるお坊さんがいるんだ」と圧倒されました。ご存知だと思いますが、あのルックスで、言葉の切れ味は明確、しかもコミュニケーション能力も高い。でも、内には何かわけのわからないものを秘めていそうな感じがする（笑）。それから、南さんとのお付き合いが始まりました。

その後すぐ、二〇〇四年に東京工業大学の上田紀行[注8]さんの『がんばれ仏教！　お寺ルネサンスの時代』（NHKブックス）が刊行されたんですね。オウム事件の後、日本仏教は沈滞して存在感がなくなったと言われるなかで、危機感から新しい取り組みをされている僧侶が紹介されていて、後に『寺よ、変われ』（岩波新書）を出した長野県松本の神宮寺の高橋卓志[注9]さんや、大阪の應典院の秋田光彦[注10]さんなどを知ることになりました。その頃から一般の参禅者が増えるなど「仏教ブーム」と言われるようになり、テーマとして仏教は面白いのではないかと。

そうした意識がひとつの形にまとまったのが、二〇〇五年の『考える人』の特集「考える仏教」です。そこでは、南直哉さんと茂木健一郎さんの対談や、應典院のルポ、仏教学者の末木文美士[注11]さんへのインタビューを企画しました。末木さんはちょうど明治以降の仏教についてまとめた『明治思想家論』『近代日本と仏教』（トランスビュー）を出されていて非常に面白かったので。

それが二〇〇六年以降、南直哉さんの『老師と少年』（新潮文庫）や末木さんの『仏典をよむ』（同）を担当するなど、徐々に輪が繋がっていきました。

佐藤　穂原さんはインドに行かれたことをきっかけに、個人として真剣に仏教と向き合ってこられた。金さんは仕事を通して、日本仏教の面白いところを見つけてこられた。

金　すでにスマナサーラ長老が活動されていた頃だと思いますが、僕がその存在を知ったのはもう少し後です。

佐藤　仏教に広く関わっていくうちに、テーラワーダ仏教にも繋がっていくというのは、今の日本の仏教界の現状だと思います。

それではサンガの川島さんは、どんな経緯で仏教書と関わるようになりましたか。

川島　私が仏教書を本格的に編集するようになったのは、二〇〇八年にサンガに入ってからです。その前は、かつて穂原さんもいらした宝島社で外部のスタッフをしていて、その時に玄侑宗久[注12]先生のムック本『実践！「元気禅」のすすめ』の制作に関わっていたりはしたのですが、仏教に特に大きな関心はなかったと言っていいと思います。むしろユングからトランスパーソナルにいたる心理学や西洋のオカルティズム、舞踊などの身体技法に興味がありました。

何が転機かと思い返すと、梅原猛さんの本です。二〇〇五年に京都国立博物館で特別展覧会「天台宗開宗一二〇〇年記念　最澄と天台の宝」が開催されたんですが、たまたま見たNHKの『日曜美術館』で、彫刻家の薮内佐斗司さんが紹介されていました。なぜか、「これは行かなくてはならない」と直感して京都まで観に行きました。展覧会自体は、天台宗の相ざらえ的なもので日本仏教の堆積に触れるような経験ができたのですが、むしろたまたまミュージアムショップで梅原さんの『最澄と空海』（小学館文庫）を入手して、それに魅了されてしまった。梅原さんならではというか、非常に人間的魅力にあふれて最澄と空海が描かれていて、平安仏教に魅了されました。

それから仏教というものが自分のなかのある位置を占めるようになったと思います。梅原さんが角川ソフィアで出されたシリーズなどを読んで、仏教欲を満たしていきました。それとほぼ同じころにスマナサーラ長老と養老孟司先生の『希望のしくみ』（宝島社）という対談本が出ました。それまでテーラワーダ仏教やスマナサーラ長老のことは彼を通じて名前だけは知っていたのですが、初めてその内容にふれて、非常に驚いた。論理的で信仰的な色彩を感じさせない、こういう仏教があるのかと思いました。そのあとに『無常の見方』を読んで、スマナサーラ長老の存在、というか、その言説は僕の中で抜きがたいものになりました。その時に書店で手に入る長老の本は全部読んだと思います。

その後、縁あってサンガの編集をさせてもらうようになりましたが、今も仏教は勉強しながらです。

金　川島さんは単行本と雑誌『サンガジャパン』の両方に関わっているのですか。

川島　はい、両方やっています。自分が知りたいことをテーマにしたり、著者との繋がりのなかで本や記事を作ったりしています。

みうらじゅんと仏教書

佐藤　穂原さんと金さんは、お二人ともみうらじゅんさんの本を世に出されています。それまでのみうらさんの仏教関連の本といえば、仏像と絡めたものがほとんどでしたが、穂原さんの『アウトドア般若心経』（幻冬舎）は「般若心経」の二七八文字（タイトルを含む）を、屋外にある看板や標識から探して一文字ずつ撮影して完成させた、異色の「写経」本。金さんの『マイ仏教』（新潮新書）は、みうらさん流の仏教入門書です。どちらもインパクトがあり、仏教書を超えて話題になりました。

金　『アウトドア般若心経』は穂原さんとこういう本を作ろうと決めてから、みうらさんの〝行〟が始まったのですか。

穂原　本の企画以前にすでにみうらさんは「アウトドア般若心経」をはじめておられました。みうらさんにとっては、あの時期、どうしてもやらなければいけない〝行〟だったのです。

みうらさんとは九〇年代の始めから『VOWでやんす！』[注13]（宝島社）という本を編集しておつきあいがあり、若い頃から仏教にご興味があって、一緒に出家しようとか言われて、真剣に調べたこともありました。

みうらさんがよくこんな話をされていました。「街の駐車場の入り口に『空あり』という看板がある。時には『空なし』というのもある。『ないものがある』『ないものがない』、これはいったいどういうことだ!?　般若心経でいうところの『空』ではないのか」と。それを、「密教的生活のすすめ」（幻冬舎新書）でおつきあいのあった宗教学者の正木晃[注14]先生に聞いてみたのです。すると「それは深い、その通りだね」と言われたのです。それで、「アウトドア般若心経」を一冊の般若心経としてまとめようということになりました。正木先生が、みうらさんと私に長時間にわたって

〈司会〉
佐藤由樹
（さとう・ゆうき）
1975年、宮城県生まれ。2006年、サンガ入社。2008年よりサンガ編集部編集長。アルボムッレ・スマナサーラ／しりあがり寿［イラスト］『怒らない練習』、小池龍之介『「我」を張らない人づきあい』、サンガ編集部［編著］『グーグルのマインドフルネス革命』などを編集。

川島栄作
（かわしま・えいさく）
1964年、東京都生まれ。シティロード、東京ウォーカー、TVガイドなどを経て、2008年、サンガ入社。谷川俊太郎／加藤俊朗『呼吸の本』、田口ランディ『仏教のコスモロジーを探して』、バンテ・H・グナラタナ／出村佳子『マインドフルネス』、鈴木俊隆／松永太郎『禅マインド ビギナーズ・マインド』などを編集。

金寿煥
（きむ・すはん）
1976年、神奈川県生まれ。1999年、新潮社入社。『FOCUS』編集部を経て、2002年から書籍編集部門に。現在は新潮新書編集部に所属。南直哉『老師と少年』『恐山』、釈徹宗『法然親鸞一遍』、末木文美士『仏典をよむ』、ネルケ無方『迷える者の禅修行』、みうらじゅん『マイ仏教』などを編集。

穂原俊二
（ほばら・しゅんじ）
1959年、大阪府生まれ。宝島社、幻冬舎を経て、2014年より太田出版発行人。村上隆『芸術起業論』、会田誠『カリコリせんとや生まれけむ』、宮台真司『私たちはどこから来て、どこへ行くのか』、鈴木大介『最貧困女子』、中田考／橋爪大三郎『クルアーンを読む』、春日武彦『鬱屈精神科医、占いにすがる』などを編集。

般若心経の講義をしていただき、インド的解釈、チベット的解釈、中国的解釈、日本的解釈なども踏まえた上で、みうらさんなりの般若心経をまとめています。

金　般若心経のある一文字を撮影するためだけに、苦手な飛行機に乗って長崎に行ったとお聞きしました。

穂原　はい、本当に日本全国を文字を求めて巡られていました。まさに、行です。最後にどうしても見つからない文字があって、それが新宿大木戸門の事務所のすぐ近くにあったんです。

金　"脚下照顧"（きゃっかしょうこ）というやつですね（笑）。

みうらじゅん
『アウトドア般若心経』（幻冬舎）より

アウトドア般若心経
みうらじゅん

穂原　そうです。新宿御苑の近くに玉川上水に関する記念碑があって、そこに、「顛」という漢字が刻まれていた。散歩していて気がついたそうです。

この般若の「若」は、花田虎上（第六十六代横綱・若乃花）が経営していたちゃんこ屋さん「チャンコダイニング　若」の看板の「若」です。「パンニャー」（智慧）の「ニャー」が「若」で、若乃花の顔とちゃんこ屋が浮かんで、なんかいいですよね。香ばしいというか。みうらさんのツボだったんでしょう。別々の店のものが二カ所、使われています。「ちゃんこダイニング若」は倒産してとっくにない。訴訟になってましたよね。懐かしい。諸行無常です。

金　これは素晴らしい"仏教本"ですよ。この本があったから、大好きだったみうらさんと、仕事ができたようなものです。

僕が『マイ仏教』を作った時は新書編集部にいまして、どうやってみうらさんと新書でご一緒できるかを考えていました。それまでみうらさんは仏像に関しては語っても、意外に仏教そのものについては語っていませんでした。それにはもちろん「自分が仏教を語るなんておこがましい」という意識があったと思うのですが、『アウトドア般若心経』が出たことで、少し踏み出されたかなと。それからは、例えばみうらさんが飲みの席で若手をつかまえてよく説教しているとラジオで聞くと、もう僕の頭の中では"説教"が"説法"に変換されて、「みうらさんは説法をしたがっているはずだ」と思い込んでいました（笑）。それなら「初転法輪をぜひ!」と、梵天勧請の気分でお願いしたら、幸い面白がって承諾してくれたんです。

テーラワーダ仏教の一般化

穂原　ずっとやってきたことですが、凄い人に出会いたいし、その方の素晴らしさを本にしたいという思いがあります。その意味では、みうらさんもスマナサーラ長老も同じことです。

佐藤　私もスマナサーラ長老の凄さは日々感じており、その凄さをいかに書籍に盛り込めるか、いつも悩みながら編集をしていますが、一般の読者にとってスマナサーラ長老やテーラワーダ仏教が、どういう立ち位置に見えるのか気になっています。穂原さんの造語"スマナサーラ・ショック"は印象的なネーミングですが、もう少し詳しく説明していただけますか。

穂原　禅の境地は、言葉では語れないとされていますが、それでは本当に悟りという境地はあるのか、あるとしたら悟った人はいるのか、といった問いを僕はずっと持っていました。それは昨年話題になった『仏教思想のゼロポイント　「悟り」とは何か』（新潮社）で、魚川祐司[注15]さんが書かれていた問題意識も全く同じだと思います。玉城康四郎[注16]先生に惹かれたのもこの方はどう見たって徳が高い、いったいダンマの顕現って何だ、と思ってからですが、院生時代の魚川さんは玉城康四郎論をお書きになっていて、当時、ご本人から読ませていただいたこともありました。悟った人がいたら会いたい、誰だってそう思いますよね。

スマナサーラ長老は、段階を踏んでいけば悟ることは可能で、その手法がテーラワーダ仏教にはあると明確に説かれています。それって日本仏教では明確にしてこなかったことです。すごい衝撃でしたし、実際みんなそこに惹かれた訳じゃないですか。もちろん当然ながら、そう簡単なことではないということもわかりますが。

川島　穂原さんが作られた『アップデートする仏教』は、ある意味テーラワーダ仏教を一般化させたところがあるのではないかと思うのですが。

穂原　いやいや、そんなに売れてないですよ。『マイ仏教』とは比べものになりません。

川島　部数的にはそうかもしれないですが、インパクトという意味では大きなものがあると思います。「アップデート」というネーミングも、「まさに!」といったところがありました。

穂原　アップデートは山下良道さんの言葉です。山下さんはそういう言葉使いがとてもうまいです。お二人とも曹洞宗からテーラワーダ、チベット密教までカバーされていて、なんといってもアメリカでの仏教の歴史と動向を生き生きと伝えてくださいました。アメリカ人に英語で仏教を教えることによって、より明確に仏教の現在と未来図を描けているということがわかります。

金　僕も『アップデートする仏教』でのテーラワーダ仏教の位置づけは、腑に落ちましたね。僕はまだテーラワーダの僧侶の本を編集したことはありませんが、島影代表がサンガを立ち上げて、さらに雑誌『サンガジャパン』ができるといったなかで、「あっ、それはサンガさんにお任せすればいいや」と（笑）。自然と仏教書内のテリトリーではないですけど、立ち位置が決まったなと。

穂原　スマナサーラ長老の法話は、赤色や緑色の日本テーラワーダ仏教協会の施本や、会報誌で読んでいたのですが、サンガさんができて長老の本がたくさん出た。だから金さんがおっしゃったように、もうサンガさんが出してくれるからいいんだ、おまかせすればいいんだと思いました。

変化する仏教書

佐藤　仏教書を編集していて、ここ十数年ぐらい前から傾向が変わってきたと感じています。これまでの仏教書といえば硬い専門書的なものか、ありがたい法話集のどちらかというイメージでしたが、お二人が編集された本のように、それとは違ったアプローチの本が目につくようになりました。みなさんは仏教書界隈の変化を、どのようなところに感じているでしょうか。

金　先ほど三省堂神保町本店の仏教書売り場を見てきたのですが、だいたい宗門別に「浄土真宗」とか「禅」と書かれたプレートで棚が仕切られていますよね。でも、その中で三人だけ個人の「コーナー」を持っている人がいました。それが玄侑宗久さんと、スマナサーラ長老、そして小池龍之介[注17]さん。十年前にこの三人は「コーナー」を持っていません

でしたよね。それだけでも書店の仏教書棚が大きく変わったことがわかります。

それから、いわゆる中高年向けのカルチャーマガジンで、年に一回ぐらい必ず仏教特集をするじゃないですか。風光明媚なお寺の写真を載せたり、仏像の解説をしたりするなかで、十数年前はそうした特集に登場する人がわりと固定化されていたんです。あくまで私の印象ですが、梅原猛さん、瀬戸内寂聴さん、五木寛之さん、そして石原慎太郎さんが法華経を語るか、山折哲雄さんが日本人論を絡めて語るか、が多かったように思います。仏教の語り部として一般の商業雑誌のファーストチョイスはその四〜五人だったような印象があったのですが、十年ほど前から人選が変わってきた。今はそういった雑誌が仏教を特集したら、それこそ南直哉さん、釈徹宗[注18]さんが出たり、あるいはスマナサーラ長老が出たりしています。そういった新陳代謝がこの十年で行われて、さらに現在はさらに若い30〜40歳代の僧侶の登場が待ち望まれる、という状況ではないでしょうか。

佐藤　金さんが以前、〝仏壇〟を広める活動をされていたそうですが、それも影響しているのではないでしょうか。

金　あれは、そのネーミングだけで一人歩きしていて、実際はそんなに真面目な活動はしていません（笑）

穂原　〝仏壇〟ってなんですか？

金　文壇とか論壇、俳壇とか言うじゃないですか。それを仏教にあてはめようと。同じように、仏教に関する言説のフィールドとか、あるいは仏教について書く人の集まりを「仏壇」といったら面白いのではないかと、知り合いのお坊さん達に冗談で話したら受けたんです。

最初は冗談のつもりだったのが、しばらくしてから活字として世に出したい、という煩悩が芽生え始めて、二〇一一年に『考える人』で「考える仏教　仏壇を遠く離れて」という特集を組みました。ひどいですよね。勝手に「仏壇」と名付けておきながら、勝手に「遠く離れて」なんて、マッチポンプもいいとこですよ（笑）。

穂原　なるほど。家庭にある仏壇ともかけているのですか。

金　そうです、そうです。だから葬式仏教的な、いわゆるコテコテの日本仏教1・0を離れて、という意味も込めました。後付けで（笑）。

佐藤　穂原さんは仏教書の変化を、どのように感じられますか。

穂原　もともと仏教書は、たくさん出版されていますよね。特に昔の禅関係の本は面白いものが多くて、大森曹玄[注19]、山田無文[注20]、内山興正[注21]、澤木興道[注22]とか読んでいると「おいおい、この人は侍じゃないのか。かっこいいなぁ」と思えてきます。著述家の星飛雄馬[注23]さんにそのことを話したら、昔はそういうアカデミックではないところに野武士みたいだけど高い境地の人がたくさんいたと言われていました。私の場合、昔から変わりませんが、どうやって自分自身が本物にどう辿りつくか、本物を見つけるか、ということしかない。ですから僕は仏教書がどう変化していくかは、興味はないです。

川島　本物ということでいえば、欧米を介して日本に入ってくる本物というのもあります。代表的なのが禅僧の鈴木俊隆老師です。アメリカのロサンゼルスに一九五〇年代末に行って、亡くなるまでの約十二年間で非常に大きい影響を与えた。ところが日本人は、そのことをほとんど、というかまったく知らなかった。

俊隆老師の英語の法話を編んだ〝Zen Mind Beginner's Mind〟は紀野一義先生の訳で『禅へのいざない』（PHP研究所）として出ていたけれども、今のようには注目はされていなかった。なぜだろうと思うのですが、それはアメリカの中での位置づけ、欧米の精神文化の文脈の中で捉えることで、俊隆老師の影響の巨大さが見えてくる。『禅マインド　ビギナーズ・マインド』（サンガ）を訳していただいた松永太郎さんはカウンターカルチャー以降のアメリカの精神文化の文脈を生きた人でした。いわばコンテクストごと日本に紹介し直したことで、鈴木俊隆の大きさが見えてきたということがあると思います。

今は海外の仏教が日本に紹介されてきていますが、そのことで日本の仏教へのアプローチも変化してきているのかもしれません。日本仏教を包むような見取り図が提示されている。

そういったなかで、今度はミャンマーで上座仏教の研究と修行をされている魚川祐司さんのような人が出てきた。ご本人は仏教徒ではないと明言されていますが、『仏教思想のゼロポイント』で非常にわかりやすい見取り図を出されたと思います。

佐藤　『仏教思想のゼロポイント』の版元は新潮社さんですが、金さんが担当されたのですか。

金　いえ、担当は私ではありません。

佐藤　作者が新人で、しかも正統派の仏教書としては、異例のヒットをしましたね。

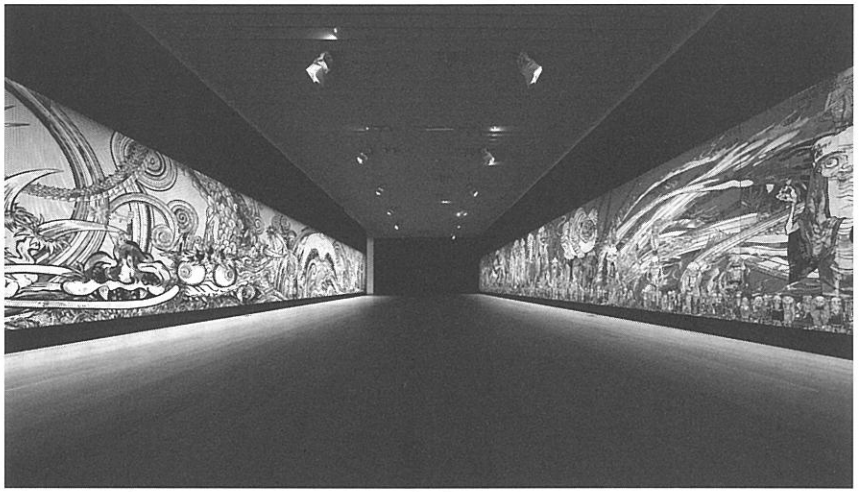
金　はい。仏教書としてはすごいことですよね。

川島　これは日本の仏教書において、ひとつのメルクマールになると思いますね。

仏教は文化だ

穂原　現代日本における仏教の在り方をみるなら、中国も含めてですが、山折哲雄先生が「仏教は文化だ」と何かの本にお書きになっていました。宗教という側面だけでとらえられないと私には読めました。

今、六本木の森美術館では「村上隆の五百羅漢図展」をやっていて、全長百メートルにも及ぶ超大作の五百羅漢図が公開されています（二〇一六年三月六日で終了）。大震災への鎮魂があるのだと思いますが、



展示風景：「村上隆の五百羅漢図展」森美術館、東京、2015年
撮影：高山幸三
画像提供：森美術館
©2012 Takashi Murakami/Kaikai Kiki Co., Ltd. All Rights Reserved.

もともとは中東カタールの王女による展覧会のオファーを受け、村上隆さんが「五百羅漢図」制作を決め、ドーハの砂漠のど真ん中で初公開されました。バーミヤン遺跡の仏像を偶像崇拝として破壊したイスラーム（破壊したのはアフガニスタンのターリバーン）の国で展示するために、現代日本最高の五百羅漢図が描かれた。仏陀の死後、第一結集に集まったアラハン（悟った人）が描かれているんですよ。それが、日本の六本木ヒルズの頂上に展示され、そこに三十一万人の入場者があった。それはどうみたってすごいことだと思うのです。

同じ森美術館で二年前に会田誠さんの個展で「電信柱、カラス、その他」が、偶然にも村上さんの「五百羅漢図」と同じ場所に展示されました。これは国宝「松林図屏風」のオマージュでもあるのですが、電信柱があって、カラスがいて、よく見ると肉片やセーラー服の端切れが見える巨大な絵です。美術史家の山下裕二先生はこの作品を国宝にせよ、と言われていました。これもまた東北の震災地の風景に見えますし、なんといっても仏教的無常観を描いた絵にも見えない。もちろん東北で電信柱の情景は宮沢賢治を想起せざるをえず、法華経にも繋がります。現代日本においてアートにも仏教が噴出しているように思います。

川島　たしかに仏教の文脈から離れたところで、本質的なことが語られているのは大事なことかもしれません。奈良、平安、鎌倉時代あたりの説話文学の文化があって、それが能とか狂言へと展開していく。仏教の世界認識や価値観を物語世界の中で体験していくというのは、教理的な言葉とは違う働きがあると思います。そういう、実感をともなう、実存のなかで吸収していくという装置が、今必要になっているのかもしれませんね。その意味では池澤夏樹さんが個人編集の『日本文学大全集』第8巻（河出書房新社）が出色です。「日本霊異記」「発心集」を伊藤比呂美[注24]さん、「宇治拾遺物語」を町田康[注25]さんが訳しおろしされていて話題ですが、本当に面白い。福永武彦[注26]さんの「今昔物語」は少し前の訳ですが、全く古さを感じさせない。往時の人の心の中に展開していたものが、現代の我々の心に蘇ってくるようで、日本仏教の文化の深さを痛感します。これぞ現代の仏教書だと思う。

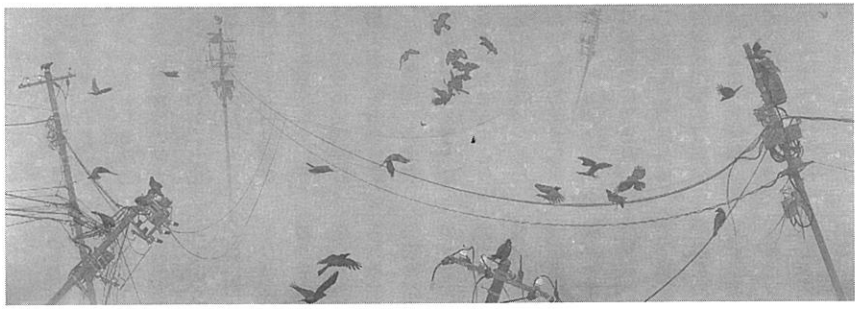
自己啓発書との距離

佐藤　仏教は文化であるというのは面白いと思ったのですが、僕たちがけっこう悩むのは、仏教書は自己啓発の棚の近くに置かれ、自己啓発書のようなかたちで売られている状況になることです。仏教書は自己啓発書とは一線を画したものだという意識で編集をしているので、そこにすっきりしないものを感じてしまうのですが、みなさんは自己啓発書との距離感をどのように取られていますか。

金　あまり「仏教書を編集している」という意識はないんですよ。著者はお坊さん、テーマは仏教、だけど一般書という意識です。普通に読んで面白かったと思っていただけたら一番嬉しいですね。面白かった結果、「仏教の教えはこうだったんだ」「こんなお坊さんがいたんだ」「こんなお寺があったんだ」といったことが伝われば、それでいいと思っています。仏教を自己啓発に寄せて、ありがたい教えを拝聴するといった方向にはあまり近寄らない方がいいかなと、僕としては思っています。

佐藤　確かに金さんの本は、活躍されている仏教者の現実がダイレクトに書籍に込められている魅力があるので、自己啓発書の棚に置かれない印象があります。

穂原　悩んでいる人が回答を求めて読むのなら、自己啓発書であろうが、仏教書であろうが同じだと思います



会田誠
電信柱、カラス、その他
2012
パネル、キャンバス、アクリル絵具（六曲一隻屏風）
360×1020cm
森美術館蔵
撮影：宮島径
© AIDA Makoto
Courtesy Mizuma Art Gallery

ね。それでたくさんの人の心を掴むのであれば、あるいは助かった、救われたという人がいるのならば、それはいいことではないでしょうか。

川島　仏教はマインドフルネスのように実践的な要素が強くなれば、どうしても自己啓発的な文脈で語られる。むしろそのほうが受け入れられやすいということもある。また、タイで出家された日本人僧侶のブラユキ・ナラテボー[注27]さんは仏教的なカウンセリングを通して相談者の悩みを取り除いていく自己啓発的なアプローチです。そういう意味では特に自己啓発を対抗軸にする必要はないのかもしれません。

佐藤　自己啓発書の一つの側面として、「自分を成長させ、確固とした自分をつくる」いう目的があると思いますが、それは場合によっては、自己を強化する、言い換えると、エゴを強くする方向性に向かっていく……。

金　その押しつけがましさは、そもそも仏教的じゃないのでは（笑）。

佐藤　まさにそうです。仏教書では無我を説いているのですから。

川島　まあ、自我を離れるからこそ、自我を上手にコントロールできるということもあるでしょうが。

金　サンガさんが作っているマインドフルネスや瞑想法の本が、自己啓発系に入ってしまうもどかしさはわかります。そこは峻別しておきたいけど、峻別するにしてもよい呼び方が見つからないでしょうか。

佐藤　うーん、自己滅却系とか。

金　そっちの方がむしろ怪しいですね（笑）。

佐藤　そうですね（笑）。まあ、自己啓発書と同じように「自己」や「自我」をテーマしながらも、仏教書は、「自己を強化する」のではなく、「自己を手放す」というベクトルを持っています。その魅力をどのように読者に伝えていくかは、これからもその都度、大切な課題になっていくと感じています。

これからの仏教書

佐藤　これまでお話いただいたように、この十年ほどで仏教書事情が大きく変わりました。一般書のように気軽に手に取れる本が増えた一方、テーラワーダ仏教が日本でも認識されるようになり関連本が出版されるようになりました。さらに仏教発祥のマインドフルネスが、医療やビジネスの分野からも注目されています。現在は仏教書の変革期と言えるかもしれません。そこでみなさんにこれからどのような思いを持って、どんな仏教書を作りたいかをお聞きしたいのですが。

金　一つは、仏教の戦後史です。末木さんとも話をしましたが、教科書レベルだと「明治時代の廃仏毀釈で日本仏教はダメになった」で終わっているじゃないですか。伝統教団の戦争責任みたいなものはすでに問われていて、ブライアン・アンドレー・ヴィクトリア[注28]も『禅と戦争：禅仏教の戦争協力』（えにし書房）で、伝統教団の戦争協力体制の批判をしています。

近代日本仏教史の研究は順調に進んでいるようですが、まだ戦後史まではいっていないのではないでしょうか。創価学会などのいわゆる新宗教がその教勢を一気に拡大したのが戦後で、その文脈で戦後の宗教が語られることはありますが、その時、伝統教団がどのような状況にあったのか――についてもっと知りたいと思っています。戦時中の反省からスタートしたのか、それとも同じように高度経済成長期に便乗して教勢を拡大できたのか……といったあたりを。そういったことを検証することで、日本仏教が歴史の遺物ではなく、現在と地続きに考えられると思いますし、現在抱える構造的な問題を考えるヒントもそこにあるのではないでしょうか。

川島　島田裕巳[注29]さんが戦前戦後の宗教に対して、わかりやすいアプローチしていますね。『日本の10大新宗教』（幻冬舎新書）は、いかに新宗教が戦前戦後にアクチュアルか、よくわかる。

金　それからもう一つは、若い世代の僧侶に期待しています。修行なり学問なりが一段落して自分のお寺に帰ってきたその人たちが、これから何を言うかに注目しています。

僕は日本仏教のなかでしかアンテナを張っていませんが、例えば松本紹圭さんによる「未来の住職塾」という試み。お寺の経営という観点をあえて持ちこんでいるので、テーラワーダの方達からすると怒られるかもしれませんが、そういう動きがあるわけです。これは日本全体の若者に言えることですが、若い僧侶は上の世代以上に将来に対して問題意識、危機感を持っているんですよ。去年は『寺院消滅』（日経BP社）という本が話題になりましたが、どうしても過疎少子化とお寺の在り方はリンクするわけですし、今までのように葬式をしていれば安泰というモデルはもう成り立たなくなることに、若い世代は気がついているわけです。そのような状況から新しく生まれる何かがあるのでは？　と考えています。

穂原　未来に最後に残る宗教は何かという問いに、スリランカに移住したSF作家のアーサー・C・クラーク[注30]が、「オーヴァーロードがやってくる前の時代に存在していた信仰のうち残っているのは、純粋な形での仏教――あらゆる宗教の中で、おそらくもっとも厳格なもの――だけだった」（池田真紀子訳「幼年期の終わり」光文社古典新訳文庫）と書いています。たぶんテーラワーダ仏教のことですよね。生物学者のリチャード・ドーキンス[注31]が『神は妄想である』（早川書房）を書いていますが、このまま脳科学や進化生物学が進んでいくと、人文的なことや神秘的なことが全て否定されていくかもしれません。島田裕巳先生の『宗教消滅

資本主義は宗教と心中する』（SB新書）は、私にはとても説得力がありました。おそらくそういった方向になっていくと思いますね。

クラークが「純粋な形での仏教だけが」と書いた。それはなぜなのか。私は厳しい戒律があるからだと思います。

現代に生きていて、ほんとうに幸せになるとはどういうことか。例えば、一人の天才ヤンキーがいて、すべての夢をかなえた。名声、金、美しい妻と家族、女、豪邸、高級車……、で、覚醒剤。清原和博はすべての夢を叶えたのに、少しも幸せではない。間違いなく地獄にいる。その辺のことも戒律から考えてみると、なにかわかる気がします。

金　清原もスマナサーラ長老のところで瞑想すればよかったかもしれませんね（笑）。

穂原　（笑）。戒律ってすごく奥が深いですよね。ただ禁止しているだけではない。最近、注目されているミニマリストとも関係しますね。こちらからも考えていきたい大きなテーマです。

それから、どんな仏教書を作りたいかという質問に具体的に答えると、とても個人的な話ですが、僕は藤田一照さんの翻訳になるティク・ナット・ハン『法華経の考察』の講義を受けて、「この人は現代の法然だ」と感動しました。ですから、その時の憧れみたいなものを形にできないかな、という思いがずっとあります。

佐藤　藤田一照さんは現在、最も活発に活動されている禅僧のお一人ですね。穂原さんがどんな本を作られるのか、同業者としても楽しみです。

それでは、川島さんはどうですか。

川島　『サンガジャパン』は二十三号になりますが、毎号毎号どういう可能性があるかを模索しているところがあります。毎号実験を繰り返しているようなものです。

金　これまでの特集で、一番ヒットしたテーマは何ですか。

川島　瞑想ですね。サンガの読者には瞑想のテクニカルな部分に興味のある人も多いので、「この瞑想とこの瞑想は具体的に何が違うのか」といった迷いを待たれているところがあります。しかし瞑想に限らず、俯瞰して物事が見られるように整理することを心がけています。それで二〇一四年に『別冊サンガジャパン　仏教瞑想ガイドブック』（蓑輪顕量[注32][監修]）を作ったのですが、医療の分野でもマインドフルネスが注目されてきたおかげで、現在、三刷まで増刷しています。

サンガはテーラワーダ仏教というのを軸に置いていますが、現在の日本では伝統的な仏教とテーラワーダ仏教は文化として別れていて、それが今後どのように変化していくか興味があります。

先ほど仏教と文化の話が出ましたが、鎌倉新仏教は政治的な仏教が大衆に降りて来て、大衆文化として花開いたという見方もできるのではないでしょうか。一遍なんてまさにそういう文化を生きた人だと思いますし。そういった意味ではテーラワーダ仏教が一般の人の手の届くところまで入ってきた、いわゆる〝スマナサーラ・ショック〟を体験した現代は、ある意味で鎌倉新仏教的な改革と捉えることができるのではないでしょうか。その後、どう発展するかということに、僕たちはアプローチしていかなくてはいけない立ち位置にいるのだと思います。本を作っていても、常にそのことがありますね。

佐藤　もともと日本人の精神性には仏教的なものが根付いていますが、それに気がつかずに生きている部分もある。その日本人が文化的に共感しやすいポイントをふまえて仏教の魅力を提示できると、新しい広がりも生まれるのではないかとお話を聞いて思いました。今日はお忙しいところ、ありがとうございました。

（二〇一六年三月　東京）

脚注

注1　鎌田茂雄：一九二七～二〇〇一年、神奈川県鎌倉市生まれ。仏教学者、僧名・慧忍。特に中国仏教史において多大な業績を残す。著書は『中国仏教史』（岩波書店）、『仏教の来た道』、『禅とはなにか』（ともに講談社学術文庫）など、九十冊以上におよぶ。

注2　小池心叟：一九一四～二〇〇六年、東京生まれ。円覚寺派宗務総長、臨済会会長を歴任。戦後、円覚寺派龍雲院・白山道場の復興を成す。著書は「まあ座れ」（山手書房）など。

注3　アルボムッレ・スマナサーラ：一九四五年、スリランカ生まれ。スリランカ上座仏教（テーラワーダ仏教）の長老。一九八〇年に派遣されて来日、日本において初期仏教の伝導、ヴィパッサナー実践の指導に従事する。著書はベストセラーの『怒らないこと』（サンガ新書）をはじめ多数。

注4　ティク・ナット・ハン：一九二六年、ベトナム出身の禅僧。ベトナム戦争時の平和運動の精神的指導者であり、感銘を受けたキング牧師から推薦されノーベル平和賞候補となる。仏教由来のマインドフルネスを、宗教を越えて西洋社会に広げた。著書は世界的ベストセラー『微笑みを生きる』（春秋社）、『ブッダの幸せの瞑想【第二版】』（サンガ）など多数。

注5　藤田一照：一九五四年、愛媛県生まれ。曹洞宗国際センター所長。神奈川県葉山の茅山荘を中心に坐禅の研究、指導を行っている。著書は『現代坐禅講義―只管打座への道』（佼成出版社）、『アップデートする仏教』（共著、幻冬舎新書）など。

注6　山下良道：一九五六年、東京都出身。鎌倉一法庵住職。曹洞宗僧侶をへて、ビルマでテーラワーダ仏教僧として出家。現在はワンダルマ仏教僧を名乗る。著書は『本当の自分とつながる瞑想入門』（河出書房新社）『アップデートする仏教』（共著、幻冬舎新書）など。

注7　南直哉：一九五八年、長野県出身。福井県霊泉寺住職、青森県恐山菩提寺院代（住職代理）。大手百貨店勤務を経て出家得度。曹洞宗・永平寺で約二十年の修行生活をおくり、二〇〇五年より恐山へ。著書は『語る禅僧』（朝日新聞社、ちくま文庫）、『老師と少年』（新潮社）など多数。

注8　上田紀行：一九五八年、東京都出身。文化人類学者。東京工業大学リベラルアーツセンター教授。宗教、癒し、社会変革などを主な研究対象としている。著書は『がんばれ仏教！』（ＮＨＫ出版）、『生きる意味』（岩波書店）など多数。

注9　高橋卓志：一九四八年、長野県生まれ。松本神宮寺住職。長野県ＮＰＯセンター代表、ケアタウン浅間温泉代表理事などを務め、お寺というスペースでユニークな取り組みを実践する。著書は『チェルノブイリの子どもたち』（岩波ブックレット）、『寺よ、変われ』（岩波新書）など。

注10　秋田光彦：一九五五年、大阪府生まれ。浄土宗大蓮寺住職。大蓮寺塔頭・應典院代表。情報誌編集や映画製作を経て、九七年に應典院を再建。同院は「檀家ゼロ、葬式・法事は一切しない」寺としてアートと市民活動の拠点として開かれ、年間三万人が集まる。著書は『葬式をしない寺―大阪・應典院の挑戦』（新潮新書）など。

注11　末木文美士：一九四九年、山梨県生まれ。東京大学・国際日本文化研究センター名誉教授。日本仏教を中心における日本思想史、宗教史を研究。特に中世仏教史の研究で知られていたが、近年は近現代の仏教思想にも関心を広げている。著書は『現代仏教論』（新潮新書）、『草木成仏の思想』（サンガ）など多数。

注12　玄侑宗久：一九五六年、福島県生まれ。臨済宗妙心寺派福聚寺住職。僧職のかたわら執筆活動を行ない、平成二〇〇一年『中陰の花』で芥川賞を受賞。著書は『中陰の花』（文藝春秋）、『光の山』（新潮社）など多数。

注13　「ＶＯＷでやんす！」：月刊『宝島』（休刊後、他誌に移動）に掲載されていた、読者が町中の広告や、新聞記事から見つけた「世の中の変なもの」を投稿する人気コーナー「ＶＯＷ」が人気を博し、関連書籍が多数発売された。みうらじゅんもコラムを連載し、一九九九年には「まちのヘンなもの」を集めて勝手に編集した「ＶＯＷでやんす！」（宝島社）を上梓。

注14　正木晃：一九五三年、神奈川県生まれ。宗教学者。専門はチベット密教・日本密教。特に修行における心身変容や、図像表現を研究。著書は「密教」（ちくま学芸文庫）、「カラーリング・マンダラ」（春秋社）など多数。

注15　魚川祐司：一九七九年、千葉県生まれ。著述家・翻訳家。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程満期退学（インド哲学・仏教学専攻）。二〇〇九年末よりミャンマーに渡航し、テーラワーダ仏教の教理と実践を学ぶ。二〇一五年の処女作「仏教思想のゼロポイント―「悟り」とは何か」（新潮社）が話題に。

注16　玉城康四郎：一九一五年～一九九九年、熊本県生まれ。仏教学者であるとともに、厳しい坐禅を修した求道の人。著書は『仏教の根底にあるもの』（講談社学術文庫）、「ダンマの顕現―仏道に学ぶ」（大蔵出版）など多数。

注17　小池龍之介：一九七八年、大阪府生まれ。月読寺住職、浄土真宗系単立寺院沙光山正現寺住職。自身の修行とともに一般に向けた坐禅（瞑想）指導を行うかたわら、執筆活動も積極的に展開。著書はベストセラー『考えない練習』（小学館）、『自分』から自由になる沈黙入門』（幻冬舎）など多数。

注18　釈徹宗：一九六一年、大阪府出身。宗教学者・浄土真宗本願寺派如来寺住職、相愛大学人文学部教授。ＮＰＯ法人リライフ代表としてグループホーム「むつみ庵」を運営する。著書は『いきなりはじめる仏教生活』（バジリコ）、『死では終わらない物語について書こうと思う』（文藝春秋）など多数。

注19　大森曹玄：一九〇四～一九九四年、山梨県生まれ。臨済宗の禅僧。禅、武道、書の大家。直心影流剣術の指導者をへて、一九四六年僧籍に入る。著書は『剣と禅』（春秋社）、『参禅入門』（講談社学術文庫）など多数。

注20　山田無文：一九〇〇～一九八八年、愛知県生まれ。臨済宗妙心寺派管長、花園大学学長を歴任。平易な言葉による大衆教化に生涯を貫き、私井の人々に「無文さん」と親しまれた。著書は『自己を見つめる―ほんとうの自分とは何か』、『十牛図―禅の悟りにいたる十のプロセス』（ともに禅文化研究所）など多数。

注21　内山興正：一九一二～一九九八年、東京都生まれ。曹洞宗の禅道場である安泰寺六代目住職、折り紙作家。澤木興道老師に長年師事して坐禅に生き、弟子の育成と坐禅の普及にも努めた。『坐禅の意味と実際―生命の実物を生きる』、『自己―ある禅僧の心の遍歴』（ともに大法輪閣）、『折り紙―古典から新作までのすべて　カッパ版』（光文社）など多数。

注22　澤木興道：一八八〇～一九六五年、三重県生まれ。曹洞宗・安泰寺五代目住職。戦後、安泰寺を純粋な坐禅修行道場として再建。只管打坐の実践を、生涯を通じて貫いた。著書に『禅に聞け』（櫛谷宗則編、大法輪閣）、『オンデマンド新装版　澤木興道全集』（第1巻～第18巻＋別巻、大法輪閣）など多数。

注23　星飛雄馬：一九七四年、長野県生まれ。著述家・翻訳家。禅、仏教瞑想に造詣が深く、仏教関連の執筆、翻訳の仕事も多い。著書に『初期仏教キーワード』（サンガ）、『45分でわかる―数字で学ぶ仏教語』（マガジンハウス）、訳書に『「増補版」手放す生き方』（アーチャン・チャー［著］、サンガ文庫）など。

注24　伊藤比呂美：一九五五年、東京都出身。詩人。著書に『良いおっぱい悪いおっぱい【完全版】』（中公文庫）、『とげ抜き、新巣鴨地蔵縁起』（講談社文庫）、『禅の教室―坐禅でつかむ仏教の真髄』（藤田一照との共著、中央公論新社）など多数。

注25　町田康：一九六二年、大阪府生まれ。小説家、ミュージシャン、俳優。芸名は町田町蔵。『きれぎれ』（文藝春秋）で芥川賞受賞。著書は『くっすん大黒』（文春文庫）、『告白』（中公文庫）など多数。

注26　福永武彦：一九一八～一九七九年、福岡県生まれ。詩人、小説家。西洋的な思考を追求しながら日本詩の方法的実験を試みた。著書は『廃市』（新潮社）、『風のかたみ』（新潮文庫、河出文庫）など多数。

注27　プラユキ・ナラテボー：一九六二年、埼玉県生まれ。タイ上座仏教の日本人僧侶。タイの森林僧院スカトー寺副住職。日本とタイを行き来し、法話や瞑想指導をするかたわら、ブッダの教えをベースにした心理療法的なアプローチにも取り組む。著書は『「気づきの瞑想」を生きる』（佼成出版社）、『自由に生きる』（サンガ）など。

注28　ブライアン・アンドレー・ヴィクトリア：一九三九年、アメリカ生まれ。オックスフォード大学付属仏教研究所研究員。専門分野は、仏教学、禅学、日本学。

注29　島田裕巳：一九五三年、東京都出身。作家、宗教学者、ＮＰＯ法人葬送の自由をすすめる会会長。著書はベストセラーの『葬式は、要らない』（幻冬舎新書）をはじめ多数。

注30　アーサー・Ｃ・クラーク：一九一七～二〇〇八年、イギリス出身。二〇世紀を代表するＳＦ作家の一人。著書は『幼年期の終わり』（ハヤカワ文庫）、『二〇〇一年宇宙の旅』（ハヤカワ文庫）など多数。

注31　リチャード・ドーキンス：一九四一年、イギリスの進化生物学者、動物行動学者。世界的ベストセラーとなった『利己的な遺伝子』（紀伊國屋書店）、『盲目の時計職人―自然淘汰は偶然か？』（早川書房）など、一般向けの科学書を多く発表。『神は妄想である』（早川書房）は売り上げが世界で二五〇万部を越えたが、過激な反宗教の主張については賛否両論がある。

注32　蓑輪顕量：一九六〇年、千葉県生まれ。東京大学人文社会系研究科教授。専門は日本仏教。特に南都における戒律思想史。最近は瞑想の視点を含めて、日本仏教における思想と実践の研究に取り組んでいる。一般向け著書は『仏教瞑想論』、『日本仏教史』（ともに春秋社）など。